

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

驚異を「見る」：共同研究：
驚異譚にみる文化交流の諸相：
中東・ヨーロッパを中心に（2010-2013）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山中, 由里子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5554

共同研究 ● 驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に—— (2010-2013)

本研究会も 2013 年に最終年度に入る。今回は、通算第 5 回目以降の研究会の内容を紹介する。前回の報告の際に、驚異譚には、その情報の信憑性を担保するための叙述の「仕掛け」があるということ述べた。その仕掛けの重要な構成要素の 1 つが、「見る」という行為に与えられる権威であることが研究会を通してわかってきた。「見る」ことが「在る」ことを証明する鍵となることを、以下の 3 つのテーマを通して検討した。

驚異としてのアフリカ大陸

第 5 回目の研究会は 2011 年 12 月 4 日に「アフリカ大陸の驚異」をテーマに開催した。まず亀谷学（東洋文庫）が「中世イスラーム世界でピラミッドを見るということ」を発表し、地理的に近くにありながら、時間的には遠い驚異であった古代遺跡ピラミッドが、アラビア語の地理書や旅行記などでどのように描かれているかを考察した。

次に、鈴木英明（学術振興会特別研究員）が「アラビア語地理書にみえるザンジュの国」を発表した。ザンジュとは、中世イスラーム世界の文献においてはアフリカ東部の沿岸部を指す言葉で、肌の黒い民族が住み、危険な海に阻まれた驚異の土地として描かれた。しかしインド洋交易の発展などにより、可知・半知の領域が拡がり、ザンジュの驚異も島嶼部や内陸部に移ったという。

境界を見た人びと

続く第 6 回は 2012 年 5 月 26 日に開かれ、驚異を媒介する「目撃者」としての旅人のトポスを採りあげた。この場合の旅人とは、実在した人物に限らず、実際に目撃したかどうかとも問題とせず、異境の驚異を見てきたと人びとが信じていた人物をも対象とした。まず、大沼由布（同志社大学）が『マンデヴィルの旅行記』と「見る」ことの権威」を発表した。採りあげられたのは、サー・ジョン・マンデヴィルというイギリス人騎士がしたためた旅行記だが、エルサレムを経て東方へ向かう旅の記録は実体験でなく、古代から継承されてきた博物学的・地理学的知識を切り貼りしたものである。マンデヴィルは今ではその実在性すら疑われているが、この旅行記が書かれたとされる 14 世紀半ばから、16 世紀半ば頃までは偉大な旅行家と見做され、ヨーロッパにおいて東方に関する情報の典拠とされ、写本や翻訳本も多く作られた。マンデヴィルの旅行記に表れるのは古典古代の文献に拠る驚異譚が多いが、マンデヴィルという架空の旅行者の「目」



犬頭人、トूसィー「被造物の驚異と万物の珍奇」。

が設定され、目撃情報としてそれらが語られることによって、驚異の信憑性がより高まっている。

一方、池上俊一（東京大学）は「彷徨の詩人——中世ヨーロッパにおける魔術師ウェルギリウス伝説」と題した発表において、実在の人物であった古代ローマ詩人ウェルギリウスが、中世ヨーロッパにおいて魔術師と見做されるようになり、彼を驚異的な現象の担い手にする説話が流布したことを紹介した。

最後に筆者が「驚異の媒介者としてのアレクサンドロス——トूसィー『被造物の驚異と万物の珍奇』を中心に」を発表した。アレクサンドロスも実在の人物であるが、彼が東方で見たという不可思議について記した架空の手紙は、「アレクサンドロス物語」の中に取り込まれ、中世ヨーロッパや西アジアでも広く流布した。今回は、特に 12 世紀のペルシア語の驚異の書に断片的に取り込まれたアレクサンドロスにまつわる驚異譚について考察した。

この会から、研究発表の後に「小ネタ・タイム」を設け、発表者以外がその会のテーマに関連した事例紹介をする時間を設けた。家島彦一（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所名誉教授）が 14 世紀モロッコの大旅行家イブン・バトゥータについて、亀谷学が 11 世紀グラナダ出身のアブー・ハーミド・ガルナーティー、黒川正剛（太成学院大学）が『南極フランス異聞』を記した 16 世紀フランスの地理学者アンドレ・テヴェについて紹介した。

イブン・バトゥータもアンドレ・テヴェも、実際に旅をしたにも関わらず同時代人に「うそつき」「ペテン師」よばわりされたのに対して、『マンデヴィルの旅行記』のように、古典のつぎはぎででっち上げられた旅行記の方が



トッピナンバにおける人食いの風習、アンドレ・テヴェ『南極フランス異聞』（1577）。

情報源として長く信頼されていたという皮肉が興味深い。

驚異の視覚化

7回目の研究会は9月30日に東京の東洋文庫で開催した。「驚異の視覚化」をテーマとし、まずは午前中に東洋文庫ミュージアムで展示中の旅行記資料や、同文庫所蔵の博物誌の稀版本などを閲覧した。

午後には金沢百枝（東海大学）による「聖堂美術と驚異譚—南イタリア・オトランド大聖堂の床モザイクを中心として」と題した発表と、林則仁（龍谷大学PD研究員）による「イスラーム絵画史の中のカズウィーニー著『被造物の驚異』の挿絵」についての発表があった。金沢は11世紀に南イタリアのオトランドに建てられた大聖堂床面を覆うモザイク画の構図やモチーフの分析について報告した。このモザイクにはアレクサンドロスの昇天やアーサー王伝説など、聖書を典拠としないイメージも含まれており、テキストの流布と視覚的イメージの創造の興味深い関係を暗示させる。林は、カズウィーニーが13世紀にアラビア語で編纂した博物誌『被造物の驚異』の写本挿絵の挿入箇所やモチーフの選択について考察した。

「小ネタ」の事例紹介も複数あった。二宮文子（学術振興会特別研究員）がペルシア語に翻訳された『ラーマヤナ』や『マハーバーラタ』の挿絵について、小林一枝（早稲田大学）が『アラビアンナイト』に含まれる「ブルキーヤの物語」と天地創造にまつわるイメージについて、黒川正剛がアンブロワーズ・パレ著『怪物と驚異について』（1573年）、見市雅俊（中央大学）が17世紀イギリス王立協会所属科学者のロバート・プロットの自然誌について報告した。さらに、筆者が17世紀ドイツのイエズス会司祭アタナシウス・キルヒャーの著作の紹介を東洋文庫所蔵の資料を使って行った。

テキスト間には直接の影響関係がなくても、ヨーロッパと西アジアの視覚化された驚異の中には共通した要素も見られる。驚異に関する語りとは独立して図像が伝播したという可能性も今後は検討しなければいけない。

総括と展望

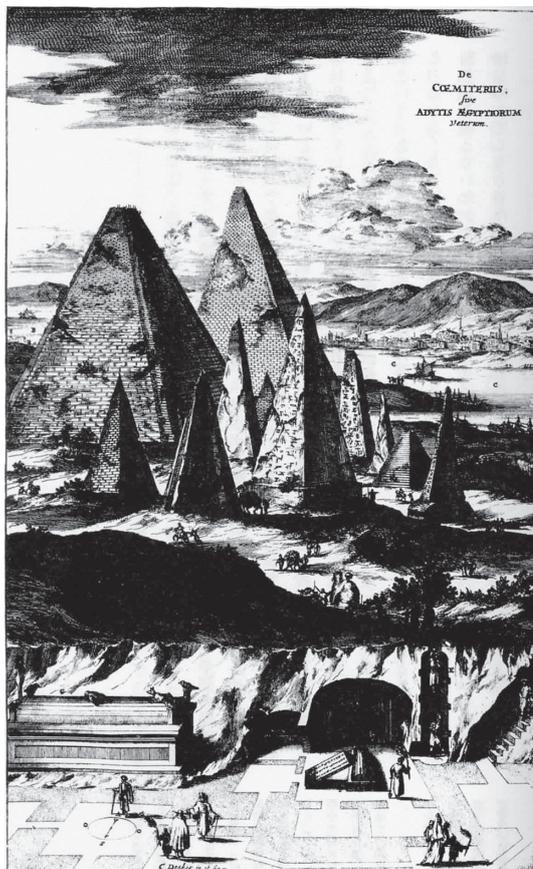
毎回、内容の深い発表と積極的な事例提供によって、活発な議論が行われた。驚きは「見る」という視覚体験によってまず目撃者に生じ、その目撃の共有が驚異譚であるともいえる。言い換えれば、誰かが「見てきた」、すなわちそれは存在したという前提がなければ、読者は驚きを共有できないのである。作り話と最初からわかっている話は、悲哀や熱情、興

奮などの感情を喚起したとしても、驚異（日常的にはあり得ない奇異の存在に対する驚き）にはつながらない。信じがたいことを怪しみながらも、その存在を受け入れるための仕掛けとなるのが目撃者なのである。ただし、架空の人物に目撃者としての権威が与えられることもある。また、実在した人物の目撃情報として語られていることも、その人物が実際にその現象を目にしたとは限らない。さらには実際に旅をしてこの世の不可思議を目撃してきた人物がペテン師よばわりされることもある。となると目撃者としての権威を得る「資格」は、どこからくるのか。それは今後、より詳細に検討してゆかなければならない。

驚異の視覚化についていえば、驚異を描いて「見せる」とことは、二次的な目撃者を作り出すという行為に等しい。たとえ稚拙な挿絵であれ、「自分の目で見る」ということが、不可思議なものの「存在を信じる」ということにつながる。それは、ネス湖のネッシーや空飛ぶ円盤のぼやけた写真が持つ妙な効力にも通じるといってしまうのは飛躍だろうか。中世の場合、画家自身が驚異を目撃していることはほとんどないといえるので、驚異譚のテキストから想像し、自身が知っているものかたちの誇張や、通常はありえない奇妙なものの組み合わせで視覚的なイメージが創生されていったのであろう。ある程度、表象のパターンができあがってゆくと、それらは模写され、また伝播していった。

討論の中では、成果公開に向けての具体的で有益なアイデアも出ている。ヨーロッパと中東における驚異譚の歴史的展開を大きくとらえることができるような比較年表や、それぞれの地域において何が驚異とされたかということが一覧でわかる事項表やグロッサリーを作成してゆくという作業が必要であるという認識を共有するにいたっている。

今後は、驚異を集めて分類するという行為についての検証がまだテーマとして残されている。「驚異の編纂」と「モノとしての驚異の収集」については次回に報告する。



メンフィスのピラミッド、アタナシウス・キルヒャー『秘儀への導者スフィンクス』（1676）。

やまなか ゆりこ

民族文化研究部准教授。専門は比較文学比較文化。単著『アレクサンドロス変相：古代から中世イスラームへ』（名古屋大学出版会 2009年）が、島田謹二記念学芸賞、日本比較文学会賞、日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞を受賞。